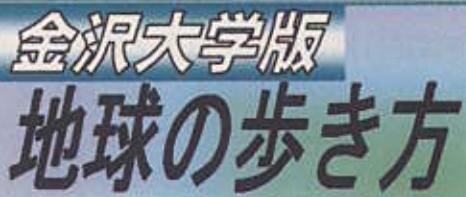




2008年1月1日

通巻1075号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会
〒920-1192 金沢市角間町
TEL076-262-6009 角間内線2105
E-MAL kanazawa@ku-union.org



《中国東北地方から中朝国境の山、白頭山（長白山）へ》

鶴園 裕（経済学部）

「ゆにゆに」編集部からの依頼は、韓流ブームのせいでしょうか「韓国の歩き方」でした。たしかに仕事の関係上、年に1、2回は韓国に行きますが、観光地へ行くこともなく、従って写真がありません。小松からは月、水、金、日の週4便がソウル（仁川空港）を往復しています。東京の羽田や成田空港、大阪の関西空港、名古屋の中部空港など大都市の空港は、一日複数便が毎日ソウルや釜山に就航しています。北九州などでは、コピーやピートルと呼ばれるジェットフォイル（水中翼船）で釜山への日帰りの出張や、1泊2日の忘年会などの宴会が手軽に可能だといわれています。年間700万人が相互に往来するソウルや釜山は、すでに隣町の感覚なのかもしれません。韓国は全土が一日経済圏といわれ、旅行に何日もかかる「僻地」はすでに存在しないといって良いでしょう。

中国は、その点では返還前の香港を含めて3回しか行った事はありませんが、やはり国の広さを感じます。移動の距離ひとつをとっても、毎回新鮮な印象を受けました。ここでは2001年9月のニューヨーク貿易センタービルに対する同時多発テロを前後した時期に、たまたま中国吉林省の省都長春から中国朝鮮族自治州の延吉を経て白頭山（中国側の名称は長白山）に登頂し、中国、北朝鮮、ロシアの3カ国を分かつ豆満江下流の防川まで旅行した経験を紹介したいと思います。

さて、その長春ですが、戦前の「満州国」時代（1932～45）は新京と名付けられ、満州国皇帝の溥儀が住む一国の首都として、独特の放射状の町づくりが行われた都市として有名です。2001年には古い町並みを壊して、新しい高層ビルがよきによきと建設中という雰囲気でしたが、町の中心部の吉林大学や満州国皇帝の住まい、「偽国务院」などは歴史的建造物として保存されているようでした。写真1、2は吉林大学の入り口で、1は9月の新入生の歓迎行事で、相談窓口を開いているような雰囲気でした。2は「ベチューンを記念する」という毛澤東の演説で有名なカナダの医師、ベチューンの肖像画のようです。中国の長征と呼ばれる革命期に医療を通して中国人民に服務したベチューンの肖像画が、文革期を超えて吉林大学に保存されていることは、少なくとも大学には国際主義を尊重する雰囲気が残されているということなのかも知れません。3の写真は、「末代皇帝溥儀閱兵台」とあるように、「偽国务院」の屋上です。今は偽満州国の罪状を暴く博物館となっています。そういうえば、長



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

春の町には、2007年の日本を象徴する「偽」という漢字が満州国に関連した歴史的遺物の説明のあちこちに見られました。何となく名古屋の愛知県庁を思わせる洋風のビルの上に和風の屋根を乗せた建物は、満州国が解体した1945年の解放後や、1949年の中華人民共和国の建国後も、しばらくは街の一体性を護るために、この様式で作り続けられたそうです。

長春から朝鮮族自治州の州都延吉までは、飛行機か列車で移動することになります。長春の空港は、日本の成田、中部空港などからも直行便がありますが、本数が少なく、ソウルからの乗り換え便の方が便利かもしれません。また、飛行場の設備も延吉の飛行場の方が新しくて立派でした。2001年の頃は、延吉のほうが韓国からの観光客やビジネスマンの入り込みが多く、町も活気付いている雰囲気でした。長春空港は、国際線旅客のための両替所もなく、空港事務官が法外なレートで日本の円や韓国のウォンを中国の人民元と交換していました。さて白頭山への登頂ですが、延吉からも早朝に出発する団体登山バスがありました。大抵は写真4のような市外バスに乗って、二道白河というところまで行き、そこで一泊して、翌朝早くから登山バスに乗り込むというのが一般的なようです。このバ

スは何かの事情でエンストを起こし、しばらく停車しているところです。戦前このあたりは密林地帯で、比較的樹林が少なくて明るい朝鮮側から登山した梅棹忠夫らの探検隊が道に迷い、さまよった話が『白頭山の青春』(1995年、梅棹忠夫、藤田和夫編、朝日新聞社)に出ています。今は2749mの白頭山カルデラ湖火口付近まで立派な舗装の道路が作られ、頂上まで数分間、かたちばかり歩くと、お天気がよければ数百メートルの真下に真っ青なカルデラ湖が見えます。その写真もあったはずですが行方不明です。その代わりの写真5が、そのカルデラ湖(天池)から流れだして松花江の源流となる流れを写したものだそうです。その河のさらに下流では温泉が湧き出しており、本物の温泉卵がゆでられていました。白頭山は活火山で、10世紀には大爆発をしたことで知られています。そのせいか朝鮮側の南側は、白い灰をかぶったせいで木々も若々しく幼い木が多かった事が、梅棹の記録には紹介されています。今は中国側の北側も密林は大部分が伐採され、白頭山ではなく禿頭山に近くなっています。

さて白頭山の登山後は、龍井などの朝鮮族の集住地域を経て、琿春市に属する防川に出かけました。6の写真は龍井の駅舎で、漢字とハングルの併記されている様子が分かると思います。龍井の町ではおむね中学校を始めとした公共の建物はハングルと漢字の併記でした。最後の写真は海に向かって左側がロシア領、右側が朝鮮領であることを示しています。中国は豆溝江の下流でロシア領と朝鮮領によって、日本海への出口がふさがれているのです。当時はそこに江澤民が揮毫した「東北の前哨を守り、中華の国威を揚げる」という大きな石碑が建てられていました。そんな地域の案内人だからか、ニューヨークで民間航空機によるテロがあった事はすでに知っており、私たちが息子から国際電話でその事実を知らされた直後の9月13日でした。中国ではグローバリゼーションの事を全球化と表記するようですが、まさに「全球化」を実感した出来事でした。帰りは寝台列車に乗って再び長春に出た後、ソウル経由で金沢に戻りました。ソウルの仁川空港がやはり東アジアのハブ空港になるのではないかという実感を得た旅でした。今度はぜひ北朝鮮側から白頭山の登山をして見たいものです。



写真6



写真7



ウェスタン

監督:セルジオ・レオーネ (1968年)

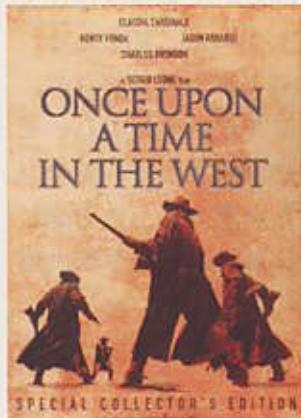
出演:ヘンリー・フォンダ、ジェイソン・ロバース、

チャールズ・ブロンソン、クラウディア・カルディナーレ他

購入:パラマウント・ホームエンタテイメント・ジャパンからDVD

『ウェスタン スペシャル・コレクターズ・エディション』として発売中

小原 文衛 (文学部)



「クライマックスは最後に」

「俺は最初からクライマックスだぜ～！」と「仮面ライダー電王」の決め台詞だが、映画という作品形式の場合、やっぱりクライマックスは最後に取っておきたい。最近の映画は最初からクライマックス、いや最初から最後までクライマックスで、どこから観ても楽しめるつくりになっているよう気がする。『ダイハード』シリーズに代表されるような90年代以降のいわば「ハイパーアクション」は、とにかく火薬と血糊を多量に使って、それらのストーリーがどんなに自分の期待したものと違っていても、損をした気持ちにならないようにできていたような気がするし、ここ数年の映画も、一種「アート」風、絵画的な意味で「ハイパー」になってきていて、これも確かに鑑賞してから損をした気持ちにはならない。タンティーノの出現以降、ストーリー的な時間の流れを前後させて見事なプロットを作り上げたり、ウォーシャウスキー兄弟の『マトリックス』3部作に代表されるように、現実そのものの虚構性を利用して観る者を幻惑したり、映画も時代の流れのなかで生き物のように進化している。これはこれで凄いことだ。それでも依然として、クライマックスは最後に残しておきたい。フロイトに「君は肛門期に固着した映画ファンだよ」と言われても、やはり表題のセルジオ・レオーネ監督作『ウェスタン』のような映画に惹かれてしまうのだ。

「フランクとハーモニカの決闘の背後に」

古い映画だし、ストーリーをご存知の方は多いと思うので、あらすじは割愛するが、とにかく、フランク(ヘンリー・フォンダ、悪役!!)、ハーモニカ(チャールズ・ブロンソン、ハーモニカを手離さない無口で不気味なガンマン…)、シャイアン(ジェイソン・ロバース、強盗団の首領、利害関係の一致からブロンソンと協力してフォンダ一味と戦う)、そしてジル(クラウディア・カルディナーレ、フォンダ一味に夫を殺され悲劇のヒロインを演じつつも、実はもともとフォンダと「関係」があったりする)、これら主要人物の誰一人をとっても、何らかの意味で「悪人」だったり、「不気味な人」(これはブロンソンのこと)だったりして、なかなか感情移入しにくい奴ばかり。特にハーモニカだ。冒頭のシーンからハーモニカで何ともいえない不気味なメロディーを奏でて、シャイアンにとっても多分最後まで何を考えているのか分からぬ人物であつたに違いない。

しかし、ハーモニカの行動を一番理解できないのはフランクであろう。この作品、ジルの夫一家(彼女は後妻として町に到着する)の痛ましい殺害シーンで少年に銃を向けるときのなんとも人を喰ったような笑みを初めとして、フランクがいかに悪い奴かということをこれでもかとばかり強調するのだが、実はフランク自身にも悩みがある。なぜハーモニカは自分を追ってくるのか?あの不気味なハーモニカの音はなんなのか?ずっと気になって仕方がないのだ。かくしてフランクは、自分が望むものを手に入れてなお、自分からハーモニカのもとを訪れ、「お前が生きていると気になる」と決闘に挑むことになる。満を辞して…向き合うフランクとハーモニカ。



エンニオ・モリコーネによる悲壮感あふれかつ壮大な音楽とともに、ハーモニカの眼差しがアップで映し出される。透きとおるように青いその目が今、ハーモニカの過去を見つめている。男が首に縄をかけられ、その弟らしき少年の肩のうえに乗せられている。少年は男が首を吊ってしまわないように必死に支えるのだが、ガクン、ガクンとバランスを崩してしまう。そして…若いフランクがやりと笑いながら、その少年にハーモニカをくわえさせる。回りではフランクの手下がその光景を楽しんでいる。もはや最期と悟った男はにこりと笑って、ひとこと弟に声をかけ、自ら弟の肩を蹴って命を絶つ…。そう、フランクはハーモニカにとつて、兄を殺した憎き仇だったのである。私たちがそれを悟った瞬間、運命の銃声が万感の思いをこめて荒野に響き渡る…。

『ウエスタン』は最後に響くこの銃声にその全存在を収斂している映画だ。ハーモニカが不気味な存在でもなんでもなく、ある種の悲しみ、あるいは「情」に突き動かされてフランクを追っていたのだと知るとき、私たち観客はこの場面を支えている全ての場面の意味を知ることになるのである。これこそクライマックス。最後の場面は終わりであり始まりなのだ。ここにいたってはじめて、シャイアンが、ジルが、そしてハーモニカがとてもいとおしい存在になるのである。このクライマックスとともに作り上げた仲間として、フランクをもいとおしく感じてしまう。ハーモニカという存在はフランクの無意識から現れた亡靈のようにも感じてしまう。意識的であろうが無意識的であろうが、すごい仕組みである。やはりこの作品はレオーネ西部劇のクライマックスなのだ。



子育ての知恵

クロールの泳ぎ方・教え方はここがポイントだ!



以前、このコーナーで自転車の教え方について書いたことがあります。今回は、クロールの教え方（泳ぎ方）について書きます。クロールと自転車はすごく似ています。平泳ぎは三輪車です（なんて言うと、北島康介にどやされそうですが）。三輪車は誰でもすぐ乗れます。抵抗が大きく、自転車が乗れるようになった人はもう乗る気にはなれません。水泳でも同じで、クロールができるようになると、抵抗が大きい平泳ぎはめったに泳がなくなります。

そこでクロールですが、あなたはクロールが泳げますか？ そう聞かれて、25メートルくらいなら泳げるよ、と答える人がかなり多い。自転車について同じ質問をされて、25メートルくらいなら乗れるよ、と応えたら、それは乗れるとは言えないよ、30分は楽に乗れるようになって初めて「自転車に乗れる」と言えるんだよ、と反論されるでしょう。クロールも同じです。実は25メートルしか泳げていない人は、まだ壁の手前にいるのです。クロールができるようになると、少なくとも15分は楽に泳ぎ続けられます（距離にして500メートル）。「25メートルでは泳げるとは言えない」という自覚をもつことが、クロールができるようになる第一歩です。

ではクロールができる人と、できない人の決定的なちがいはどこにあるのでしょうか。簡単です。クロールができる人は沈まない、クロールができない人は沈んでしまう（したがって呼吸が続かない）、というこ

とに尽きます。よく、スイミングスクールなどで「人間は本来、浮くものです。沈むのはどこかに余計な力が入っているからです」というのがありますが、あれはウソです。

ならば、クロールができない人は、なぜ沈み、クロールができる人は、なぜ沈まないのでしょうか。これこそが問題の焦点です。結論から言うと、クロールができる人は常に水に対して二点で体を支えているのに対し、できない人は一点でしか支えていないから沈むのです。言い換えると、クロールができる人は手の動きと足の動きがシンクロしていること、これが最大のポイントです。図解してみましょう。

上の丸が両方の手、下の丸が両方の足です。クロール中の人の足は動きが速くてわかりづらいですが、基本は右手一かきに対して左足一キックです（これが2ビート=両の手のかきの間に足を左右合わせて2キック）。バタバタしているように見えるのは、大きなキックの間に小さなキックを左右一回ずつ入れているだけです（これは6ビート=両の手のかきの間に左右合わせて6キック）。キックにはこの2種類しかありません（それ以外の回数ではシンクロできませんから）。初心者は当然、簡単な2ビートからおぼえましょう。図のように、手と足がシンクロしていれば、常に水に対して二点で体を支えていることが理解できるでしょう。逆に、シンクロしていなければ、どんなにバタバタ激しいキックをしても、その瞬間その瞬間では一点でしか水に対して体を支えていません。だから沈むのです。

ほとんどの教則本では、解決策として、「ゆっくり泳げ」という指示が出てきます。この「ゆっくり」という指示の意味が、泳げない者には理解できません。これが意味するところは要するに、ゆっくりかき、ゆっくりキックすれば、手と足が偶然シンクロする瞬間が多くなるということなのです。それでコツをつかんだ人が多かったのでしょう。しかしどんなにゆっくりかいたりキックしても、一点でしか水に対して圧力をかけていなければ、やっぱり沈みます。焦点は「ゆっくり」ではなく、「手と足をシンクロさせること」=「水に対して体を常に二点で支える」ことなのです。

ここまでわかれば、すぐにできるか、と言うと、残念ながら答えは否です。最初に右手・左足、左手・右足をシンクロさせようとすると、体の左右でちがう動きをしなければならないので、すごく難しく感じます。ちょうど、左右でちがう指の動きをやれ、と言われたときのようなとまどいを感じます。

でも、これを突破するよい方法があります。それはドルフィンクロールです。つまり手はクロールのかき、足はバタフライの時と同じドルフィンキックで泳いでみます。

大事なことは、二本そろえたドルフィンの足と、手のかきをシンクロさせることです。こうすれば、変則的ですが、二点で体を支えることになります。これを一週間もやったあとで、徐々に、右手をかくときはドルフィンの両足のうち右足の力を抜く（=結果として右手と左足がシンクロする）、左手でかくときは左足の力を抜く（=左手と右足のシンクロ）をしていきます。そうすると、比較的スムーズに本来のクロールに移行できるはずです。息継ぎを右側でする人は、直前の右かき+左足キックによって体が浮き上がり、楽に息継ぎができることが実感できると思います。

これ以外にも、浮き方・キックの仕方・息の吐き方など、いくつかのポイントがありますが、それらは既存の教則本に書かれているので、ここでは述べません。多くの皆さんがクロールをマスターされ、また子どもたちが、わざわざスイミングスクールに行かなくても、学校の水泳の時間だけで泳げるようになることを、密かに期待しています。

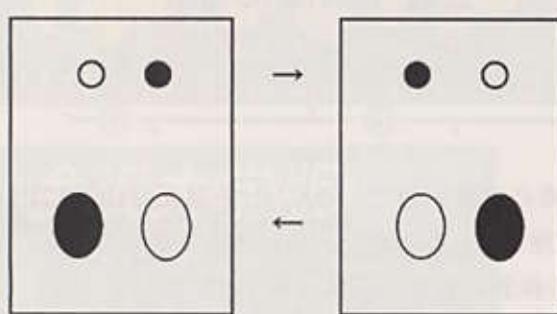


図1

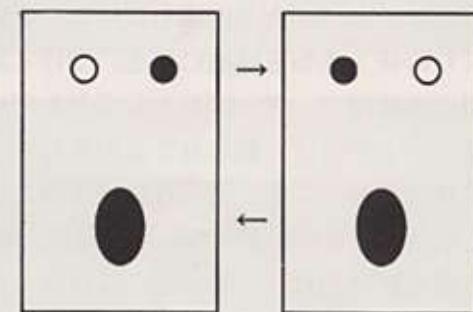


図2





ちよつといいは店

民宿「東度の家」

TEL・FAX 0767-59-1631



七尾市内から富山湾に向かい車で15分、山を越え富山湾に出で右に曲がりすぐ「東度の家」があった。古い大きな漁師の家だ。玄関を入れると、右手の縁側に大きな冬瓜と獅子ゆずが…。

きれいに磨かれた木のぬくもりと温かいおかみさんの出迎えがあり、部屋に案内される。部屋数は5つぐらいあるのだろうか。一息ついたところで夕食の案内があり、囲炉裏のある部屋に。

テーブルには大皿の刺身の盛り合わせ（サザエ、鯛、鰯、鮓、甘エビ、イカ）、赤カブのサラダ、水菜の胡麻和え、漬物、手羽先の詰め物（餃子の具、明太子）が並べてあった。刺身の美味しいこと。新鮮で甘みがあり、歯ごたえもある。刺身の棗も自家製の大根でこれもまたしゃきっと美味しい。ご主人が「富山湾の魚は格別や、うちは定置網で朝漁をして獲れたてものしか出さない。今が一番美味しい時期や」と、新しく刺身を出してきた。＊力マス（初めて食べた！身は柔らいがこりっと舌に残る甘みがある。）＊アオリイカ（げそと内臓もこりこりと新鮮！一味とゆずが絶妙な味を出してる）＊カワハギ（これまたびっくりの味！きもを醤油に溶き、つけて頂く。とろりとうんま～い！）ふくらぎ、むつ（これもお初）は自家製の梅味噌で、さっぱりとしてどんだけでも入る。お腹いっぱい！もう駄目と言いつつ、熱々の鮓大根も美味しいと平らげ、鯛の丸ごとの煮付けも骨だけになった。極め付けは、はさかけのこだわりのお米を中島の名水で炊いたご飯。入らないはずのお腹にみんな収まってしまった。ご夫婦で営み、親切で心のこもったもてなし、何もかもが美味しく満足度200%。食後は囲炉裏を囲み語らう。白い壁と大きな梁、漆塗りの戸、落ち着いた雰囲気で、炭の仄かな暖かさがゆっくりとした時を与えてくれた。（T）



住所：石川県七尾市百海町ノ部18

TEL/FAX: 0767-59-1631

七尾市街から東、国道160号線へ、海から山道に向うとすぐに小さな漁港にでます。

○○○編集後記○○○

今年は「戌（つちのえ）」のネズミ。私も「戌」生まれなので、〇十歳の大台です。ホントに中年になると時の経つのが速いこと速いこと。新執行部が発足して既に4ヶ月。ようやく「ゆにゆに」を出すことが出来ました。ここまで遅れたのは、ただでさえ学域再編末期の多忙に加え、学長選挙、病院の7対1看護問題、人勧完全実施問題、附属学校教員の給与改善など課題山積で、みんなの顔に「原稿書いている暇ないよ～」と書いてあったからです。そこで執行部随一の映画マニアの小原さん、組合書記研修で能登を回った田伏さん、以前にも別の原稿をお願いした鶴園先生、そして編集長の村井が書き、何とか本数をそろえました。次号を出す頃は、現在にも増して大変な時期を迎えると思います。ぜひ多くの皆さんの投稿・執筆をぜひともお願いします。（M）